

桜井光昭著『敬語論集—古代と現代—』

辻村 敏 樹

本書は著者の前著『今昔物語集の語法の研究』（昭和四十一年三月刊）に次ぐ第二論集であり、昭和四十年十二月から五十五年十二月に至る十五年間に『学術研究』その他に掲載された十編の論文を七章に章立てして収めてあり、付録として『万葉集』以下近松の作品に至る八種の古典の敬語一覽が添えられている。

第一章古代敬語試論は本書の序論とも言うべきものであり、著者の敬語についての基本的な考え方が提示されている。巻末の初稿一覽には『学術研究』一四号掲載としてあるが、序章にふさわしく全面的に書きかえてある。

敬語は普通「敬意を示す語」とか「敬意に基づく表現」とされるが、「使用対象に敬意を懷いていないのに敬語を使用することもある」ことなどを考えて、著者はあえて敬意という語を避けて敬語を次のように規定する。

敬語とは、平常語と対応して優遇的意義を表現する語である。優遇とは、使用対象を、平常語で待遇するよりは、より上位の者として待遇することである。したがって、話し手（書き手）は、かならずしも使用対象を自己よりも上位者として待遇するとは限らない。

「したがって」以下と前段部分とのつながりはやや不明瞭であ

るが、要するに著者の言いたいところは、敬語は「上位者として待遇する」ことではあるが、その「上位」とは平常語で待遇する場合と比較してのことであって、表現主体と比較しての言いではないということであろう。一見識である。

敬語を以上のように規定した上で著者は現代敬語と古代敬語を比較して、前者は商業主義に基づく主観的個人的なものであり、後者は身分制度に基づく客観的社会的なものであるとする。現代敬語を一言で商業主義と呼ぶのはいかかと思われるが、大まかに言えば氏の言われるとおりであろう。

また、敬語を辻村の説に倣って分類した上、関係謙讓語（辻村の言う関係下位主体語）の用法に

A 素材間の上下関係を規定して、それを通じて、上位者を優遇する場合。

B シテ・ウケテの上下関係とは無関係に、ウケテを使用対象として優遇する場合。

C 関係謙讓語の二次的な属性の表現と見なすべき場合。の三つのあることを指摘する。

ABについてはすでに従来言われていることであるが、Cの「二次的な属性の表現」とは、著者独自の見解である。「二次的な云々」という言い方はわかりにくいのが、敬語を使用しないのが普通であるような低い対象に用いられている場合を指しているようであり、著者は「敬語の形骸化したもので、厳密には敬語とすべきではない。」とする。敬語の非敬語的用法とでも言うべきものであろう。

さて、第二章 院政・鎌倉・室町期の敬語、第三章『古事談』の尊敬語、第四章『撰集抄』の敬語の三章は、ひたすら中世の敬語を研究して来た著者の独擅場とも言ふべきところであり、新見も多く、業界を裨益するところ大である。

第二章の大綱は『講座国語史第五巻・敬語史』（昭和四六年一月）に「第四章近代の敬語」として書かれたものによっているが、その後の著者自身及び学界の研究成果を踏まえて大幅に手を加えてある。

この章だけでなく、他の章でも鋭意人の説を紹介し、それをも踏まえて自説の展開を試みているのは、氏の学問に対する謙虚さと前向きな姿勢を示すものとして評価される。

以下限られた紙面ながら本書の新見を中心に注目すべき点のいくつかに触れてみよう。

第二章は尊敬語・謙讓語等に分けたものを用言中心に語の表す意味によって細分し、その用法敬度について詳説しており、中世敬語の実態が余す所なく明らかにされている。

酒はうるはしうならせ給ひける（著聞集・四七五話。使用対象白河院）

のように「ナル」が飲食の敬語に用いられた例の発見、「ゴザアル」の次に見るような類例乏しい尊敬の補助動詞としての用例の指摘など資料の浅い読みでは得られない発掘が多い。

新帝幼主ニテ御座有ル上、（西源院本太平記・二一、吉野新帝受禪事同御即位事、但しこれは「義助責落黒丸城事」の例か）第三章の『古事談』の尊敬語は『學術研究』二九号（昭和五

五年二月）に発表されたもので、先ず「令」のよみと用法について慎重に検討した上、「シム」が平常語に伴って尊敬・謙讓両様に用いられることを指摘し、次いで『古事談』の尊敬語のうち活用語の主なものについて検討している。

「古事談」における仰セラルの優勢と宣フの劣勢は、抄物を経て、後代の話し言葉へ連続していくといった事実や、「死去」を意味する尊敬語が「令義解」の「薨」「卒」「死」の区別と一致しないといった事実の指摘など注目すべき叙述が多い。

第四章の『撰集抄』の敬語は、「撰集抄のイマソカリを中心」（『国文学研究』五一集昭和四八年一〇月）「撰集抄の『みそなはず』について」（『説話文学研究』六号、昭和四七年三月）「撰集抄の聞コユを中心に」（『學術研究』二二号、昭和四八年二月）「撰集抄の侍り」（『国語学』九九集、昭和四九年二月）の四論文をもとに加筆されたものである。

イマソカリについては、この語が撰集抄に一二〇例も見られること、少数ながら「行ク」「来ル」の意にも用いられること、位相的には文語で、道心者の用語と考えられることなど、平安時代のイマソカリの様相と異なる点について注目すべき見解が示されている。

キコユについては、「撰集抄」におけるこの語の用法を中古近世のそれと対比し、シテウケテの関係の面から詳細に検討し、敬語（謙讓語）としての性格のものではなく雅語と称すべきものとなっていると結論づけている。聞くべき意見であらう。

「侍り」も平安朝のそれと異って地の文に頻用される文語であ

り、敬度の低い敬語であると。詳細に検討された『今昔物語』などの「侍り」との対比による結論で、穏当な見解と言える。

以上、第四章までは専ら古代敬語を対象とした考察であるが、第五章から第七章迄は現代敬語が中心になっている。

第五章の「殿」と「様」の使い方・「君」の由来と用法は『国文学解釈と鑑賞』（昭和四十七年五月臨時増刊号）に掲載されたものである。

「殿」「様」「君」の敬度の相違を近世から現代に至る用例、またこの語の敬意について言及したものが剋明に追究されているし、取上げられた資料は未見のものが多く読むだけでも楽しい。

第六章の「マス（デス）」による敬語表現の最低規準」は、『学術研究』二二号（昭和四十七年一月）に発表されたものである。

デス・マス体の文章の主張者であり、実践家である中村通夫氏の『風俗小説論』を例にとって分析し、マス表現の通則を求め、それを検討してマス表現の最低規準を次のようにまとめている。

1 文末はマス表現とする。

2 文中でも接続助詞ガ・ケレドモ（ケレド）の前ではマス表現とする。

3 1・2以外は平常語が用いられる。

この結論は明快であるが、そのあとに例外付記として記されている引用部分についての説明は慎重すぎてややわかりにくい。

第七章の「堀辰雄氏『かげろふの日記』に見る敬語表現」は、やはり「学術研究」掲載の論文（二〇号、昭和四十六年一月）であるが、著名な作家の文章における敬語の誤用例を詳細に分析し

たもので、珍しい論である。

敬語の用法について、それを誤用と見るか否かは、論者の敬語に対する意識によってかなり異なる面があるが、著者の指摘するところ概ね評者と一致する。三島由紀夫氏が「あれには敬語の間違いが非常に多い。」と言ったのもうなづける。

ただ、なぜ誤用が特に多いかについては、著者が言うように堀氏の病弱による推蔽不十分や欧文体の影響等だけでは説明しきれないようで、やはり作者の生活言語との関係を考えなければならぬように思う。

以上順を追ってその内容を検討したが、本書に一貫するところは著者の客観的な分析態度であり、それが古代から現代に至る敬語の変遷の姿を見事にとらえている。

中でも、中世敬語に関する詳細精緻な考察は、量的にも本書の三分の二を占め、質的にも前人未踏の研究として、今後敬語史を研究する者の必ず通らなければならない関門となるであろう。

前著の『今昔物語集の語法の研究』が全編三六〇ページのうち二五〇ページを敬語に費しながらその書名のため、未見の人には敬語論として見逃されがちであったのに対し、本書は敬語論のみを集めたのもすっきりしている。

なお、巻末付録の「作品別古典の敬語一覧」は、一見、語の羅列のように見えるが、中段の解説は行き届いている。

最後に一言言えば、前著に比べて本書には著者の視野の広がりが見られて嬉しい。著者の一層の研鑽と活躍を祈ってやまない。

（昭和58・4 明治書院 A5版 三二八頁 四八〇〇円）